

スイス八州同盟の成立

瀬原義生

目次：はしがき

- 1．ルーツェルンの加盟
- 2．チューリヒの加盟とオーストリアとの軋轢
- 3．ベルンの加盟
- 4．ゼムパッハの戦いとネーフェルスとの戦い
- 5．結束の強化へ

はしがき

1291年の原誓約同盟による「永久同盟」の結成、1315年のモルガルテンの戦い、同年の「永久同盟」の更新によって、スイス誓約同盟の基礎が置かれたのであったが、ハプスブルク家は、北スイスになお広大な領地をもっており、機会があれば、彼らは誕生したばかりの農民共同体の同盟を押し潰す能力を十分にもっていた。原誓約同盟が、この弱点を補強するには、また、平野から山地への食糧輸入を確保し、ザンクト・ゴットハルト峠を中枢とする商業交通を振興するためには、周辺の都市共同体との連携を強化し、さらにはそれらと同盟を結成するほかにはなかった。この都市共同体の方にも、ハプスブルクとの対立が深まるにつれて、森林三州との同盟が必須となっていき、その結果、八州同盟が結成されることになるが、その過程はそう簡単なものではなかった。各都市の置かれた対内、対外的状況にしたがって、紆余曲折をたどったのであり、本稿は、その過程を追ってみようとするものである¹⁾。

1．ルーツェルンの加盟

ルーツェルンは、ザンクト・ゴットハルト峠を通過するイタリアとの通商路の北の終点を意味しただけに、森林三州との結び付きがもっとも強く、シュタウフェン朝末期、大空位の時代には、一時的に森林三州と同盟を結んでいたことがあるが、他方では、かねてよりハプスブルクの勢力が強く、市内の大領主ルーツェルン修道院が同家によって買収（1291年）されてからは、とくにそうであった。であるから、「永久同盟」が結成された直後、オーストリア大公アルブレヒトは、ルーツェルンに森林州との交易を禁じ、森林州の経済封鎖に出ることができたのであるが、それは、反面、市民を大いに苦しめ、反ハプスブルクの風潮を醸成した。

モルガルテン戦後、ハプスブルク家の態度はやや軟化し、ルーツェルンに交易の自由を認めたのであるが、1326年大公レーオポルトの死後、再び禁令が強化されると、反ハプスブルクの空気は決定的となった。市参事会のなかに「大公不在の不安定な状況にあって、都市の権利を守るため」と

称する盟約が結ばれ、加盟者は市参事会員36名中、26名にたった。それは、1330年には、市参事会の全員を占めるようになり、さらに市民全員がそれに誓約するにいたった。これを促進したのが、スイス中央部を管轄するVogtei Rotenburgの守護に任命されたハプスブルクのミニステリアル、Hartmann von Ruodaの横暴であったといわれる。1332年、彼が市内での誓約団体結成の禁止を命令すると、逆にルーツェルン市は森林三州との「永久同盟」に踏み切ったのである²⁾。

同盟文書によると、冒頭に、ルーツェルンの領主オーストリア大公に対する、森林三州のドイツ帝国ならびに皇帝に対する奉公を、同盟規約の適用から除外し、また各州がそれぞれのこれまでの「良き慣習」を保持することを規定(第3,4条)したうえで、第6,7条は、加盟各州の対外的、対内的脅威にさいして、費用各州負担のうえで相互に防衛し、援助を与えるとしている。原誓約同盟三州のあいだで紛争が起こった場合には、ルーツェルンは多数派二州に味方をする事、各州は、他州の了解なしに、他領主との同盟に入ることはしないと協約して、同盟の安定化を図っている(第8,10条)³⁾。

ハプスブルクへの忠誠保持を認められているにせよ、ルーツェルンの「永久同盟」への加入は、同市に対するオーストリア側の疑惑を増大させたことはいうまでもない。1333年の、オーストリア支配下の全帝国都市、領邦都市、貴族を包括した「エギーデ Ägideのラントフリーデ」には、ルーツェルンとグラールスの名前は入っていないのである。オーストリア大公オットーは、ローテンブルク守護に都市参事会員任命の全権を与え、1335年には、ツォーフインゲン Zofingenに造幣所を設立して、そこで鑄造された貨幣を関係所領で流通させようとした。この処置は、オーストリアと誓約同盟四州との対立を険悪なものにしたが、とくにルーツェルンの下層市民たちの反撥は激しく、手工業者を中心にして「300人委員会」を結成して、弱腰の市参事会を批判した。「300人委員会」はまもなく消滅したが、それに準じた全市民集会に支援された市参事会内の誓約同盟派はますます強化され、これを覆そうとした1343年7月24日の上層市民たちのクーデター計画は失敗におわつた。ルーツェルンとハプスブルクの関係は、なお切れたわけではなかったが、分裂の時期は迫っており、ゼムパッハの戦いによってその過程は完結をみるのである⁴⁾。

2. チューリヒの加盟とオーストリアとの軋轢⁵⁾

チューリヒの場合は、複雑である。

1292年10月、東スイスで結成された反ハプスブルク連合の一環として、チューリヒは、ウーリ、シュヴィーツと相互防衛同盟を結んだが、翌年4月、ヴィンタートゥール前面の戦いでハプスブルクのために惨敗し、親ハプスブルク政策に転じた。この状態は1330年代まで続くが、1336年にいたって、反転が起こる。

市内の独占的土地所有者である都市門閥家と大商人によって、市政が壟断されているのに、かねて不満を抱いていた小商人、手工業者らは、1336年6月7日、騎士ルードルフ・ブルンを指導者に立てて、いわゆるツunft闘争を起こした。ブルンらは、1336年7月18日、「第一誓約文書」を作成したが、それによると、旧市参事会員12名が追放され、同10名は終身にわたって参事会員選出資格を剥奪された。代わって、13の政治的ツunftが組織され、そこから各1名の参事会員が選出され、これまでの門閥市民、非ツunftの大商人らはコンスタッフェルKonstaffelと称する組織にまとめられ、そこから13名の市参事会員(うち、7名は騎士、大商人)をおくりだすこととされた。

これとは別に、ブルンは市長の地位に就任し、その任期は終身であり、独裁的権力をふるった。1337年、皇帝ルートヴィヒ・デア・バイエルは、これを承認し、チューリヒのツンフト市政は確立をみたのである⁶⁾。

しかし、納得しなかったのは、追放された都市門閥家族たちである。彼らは、チューリヒ湖南端のラッパースヴィル Rapperswil 伯である Hans von Habsburg-Laufenburg 有力なハプスブルク分家のもとに身を寄せ、そこからツンフト市政転覆を画策した。ハンスは、チューリヒ大商人やユダヤ人に借金しており、借金棒引きの条件で、その画策に積極的に関与していった。1337年、早くも戦闘が起こったが、チューリヒ側は、亡命参事会員の財産を没収するとともに、周到な準備を積んで攻撃に着手し、そのなかで伯は戦死をとげ、オーストリアが介入してきて、第一次の衝突はチューリヒ有利のうちにおわった⁷⁾。戦死した伯の後任には息子のハンスが就き、オーストリアがこれを後見したが、若ハンスもまた亡命参事会員たちの企てに同調した⁸⁾。1350年2月23日、亡命者たちは、刺客を市内におくりこみ、市内の同調者を糾合して、ブルンの暗殺と政権の奪取を企てた。しかし、企ては事前に漏れ、侵入者たちは市街戦のすえ惨殺され、それに加わっていた若伯ハンスも捕らえられた⁹⁾。その五日後、チューリヒはラッパースヴィルを攻めて、これを占領し、紛争に決着が付いたかにみえたが、横から障害が入って、それは先に延ばされた。

というのも、同じころ、1349年、アルザスの貴族ヴァルドナー Waldner von Sulz とチューリヒ市民である騎士ミュルナー Mülner とのあいだにフェーデが起きていたからである。ヴァルドナーが、商旅中のチューリヒ商人から財産を奪った（その総額は、奪われた商人24人、3,348グルデンにたった）のに対し、チューリヒ側は、報復としてアインジーデルン修道院への巡礼中のシュトラスブルク市民70人、同じくパーゼル市民200人を抑留した。シュトラスブルク、パーゼル両都市は、オーストリア大公、シュトラスブルク、パーゼル両司教の支持をえて、戦う姿勢を構えた。この争いは、1350年7月6日、ハンガリー王妃で未亡人のアグネスの調停で和解し、都市がそれぞれの損害を受けた市民に補償をするということで解決した¹⁰⁾が、この騒ぎで、ブルンは同盟者の必要を痛感し、まずハプスブルクとの緊張緩和、それとの暫時的同盟を考えたのであった。

1350年夏、オーストリアとの7年間の同盟が提案され、ザンクト・ゴットハルト、ボーデン湖、ジュネーヴ湖で限られた範囲内での相互援助、他の了解なしでの同盟をしないこと、チューリヒの内政を保証するという内容で話し合われた。しかし、城外市民の受け入れの可否をめぐって議論はかみあわず、同盟交渉は失敗に帰した。おそらく、同時平行的に行われていた誓約同盟四州との交渉が、チューリヒにとり、有利なものであったからであろう。同年秋、チューリヒは再度ラッパースヴィルを攻撃し、これを破壊して、自らの決意を示し、1351年5月1日、ルーツェルン、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン四州と「永久同盟」を結んだ¹¹⁾。

その条約によれば、相互援助の適用範囲は、グリムゼル Grimsel 峠を起点として、アーレ河に沿って河口まで下り、そこからライン河を溯って、トゥール Thur 河口にいたり、同河を溯ってトッゲンブルク Toggenburg 地方を越え、それからフォルダーライン Vorderrhein 渓谷、ゴットハルト山塊、レベンティーナ Leventina 渓谷を経て、オーヴァーヴァリス Oberwallis (ゴムス Goms) にたつる線で囲まれた地域と規定されている(第3条)。相互援助は、無償、つまり出勤する州の負担でおこなわれる(第5条)。ある加盟州に対し、不意の襲撃がおこなわれた場合には、他州は出勤要請がなくても、援助に赴く(第6条)。チューリヒと誓約四州のあいだで紛争が起こった場合には、仲裁裁判によって解決を図るが、その裁判開廷の場所はアインジーデルン修道院とする(第10条)。



1400年八州同盟領域図

チューリヒのブルン体制を，誓約四州は保証する（第20条）。ただし，この同盟は，原誓約同盟三州とチューリヒの場合は帝国と皇帝に対して，ルーツェルンの場合はオーストリア大公に対して，これまでなしてきた同盟と奉公を妨げるものではない（第21～25条）。そして，同盟は，10年毎に更新し，永久的に継続する（第27，28，30条）ものとされているのである¹²⁾。

ブルンには，特別の同盟結成という意識はなく，単に母市防衛の協定を結んだという意識しかなかったとおもわれるが，オーストリア大公アルブレヒト二世の方は，北スイスにおける自己の政治的地位が脅かされたと感じ，軍力で事態を打破しようと考えた。1351年9月，彼は，ブルグに軍隊16,000を集め，チューリヒに向けて，ラッパースヴィル城の再建と損害賠償を要求した。それが拒否されると，9月20日，チューリヒの包囲を開始し，大公は，同盟規約にもとづいて，ベルン，ゾーロツルン，バーゼル，シュトラスブルクから増援部隊を召集したが，チューリヒ側は，誓約同盟四州の応援をえて，反撃に出，さらに防戦体制を強めるため，1351年冬，チューリヒと誓約軍は，グラールス Glarus に進軍し，翌1352年6月4日，同州を「永久同盟」へと加盟させた。その5日後には，同盟軍はツーク州 Zug へも進軍するのである¹³⁾。

アルブレヒトは，再度，陣容を立て直して，1352年7月，チューリヒを包囲するが，包囲側に戦意は乏しく，オーストリア軍に同行していたブランデンブルク辺境伯ルートヴィヒの仲介で，休戦交渉が始められ，いわゆる「ブランデンブルクの平和 Brandenburger Friede」が成立することになった。それによると，オーストリアはシュヴィーツ，ウンターヴァルデンに対する支配権を暗黙裡に放棄する。それに対して，両州は，オーストリア側に州内のハプスブルク領地，同支配下の教

会，修道院からの地代の収取を認める。また，グラールスとツークをオーストリアの支配下に返す。チューリヒはラッパースヴィルを返還する。チューリヒ，ルーツェルンは，城外市民受け入れ政策を放棄する，というものであった。大公アルブレヒトは，しづしづこれを受け入れ，誓約同盟側も，不利ではあったが，これに従った。ただし，後者にとっては，それを償うかのように，1353年，ベルンが誓約同盟に加入してくるのである¹⁴⁾。

3．ベルンの加盟

ベルン市の歴史は，あまり知られていないので，やゝ詳しくたどってみる¹⁵⁾。

ベルン市は，1191年，ツェーリングゲン大公ベルトルド五世によって建設された都市である。おそらく，皇帝によって同家に統治が委任された東ブルゴーニュ地域　アーレ河以西，ユラ山脈までを軍事的に押さえるために，その軍事的拠点として建設されたものであろう。すでにそれ以前に，ツェーリングゲン家は，1157年にフリブール市 Fribourg i.Ü.を，次いでムルテン市 Murten を建設しており，ベルトルドは，フリブールの都市法を修正して，ベルンに賦与したようである。都市造りに従事したのは，周辺の自由人貴族，ツェーリングゲン家士たちで，彼らは，城塞（勤務）法 Burgrecht にしたがって，市内に移り住み，その防衛にあたり，その勤務に対する報酬として，都市内の収入，および都市に付属する周辺集落からあがる地代を封収入（Burglehen）として受け取っていた¹⁶⁾。彼らの筆頭者はブーベンベルク Bubenberg 家であり，つづいて Kramburg, Kien, Jegisdorf, Egerdon, Krauchtal 家などであった。彼らは，その後相当長期間，市参事会員をはじめとする諸役職を独占することになる。

1218年，ベルトルド五世が没し，ツェーリンガーが断絶すると，ベルンは，帝国領に建設されていたので，帝国に帰属することになり，いわゆる帝国都市になる。ときの皇帝はフリードリヒ二世で，彼は，1218年，同都市に自由特許状を与えたといわれる¹⁷⁾。同時に都市管理官として，守護 Vogt (Causidicus) を任命し，その下に実務運営者としてシュルトハイス Schultheiss (執政) を配した。しかし，大空位時代に守護の実権は失われ，シュルトハイスが実権を握ることになる。都市参事会は，1224年にはじめて現れるが，人数は12人，半数は貴族から，半数が市民から構成されている。このころ，ようやく市場都市となり，1218年，年二回の大市開催が認可され，1292年の史料によれば，週市が開かれている¹⁸⁾。

しかし，成立当初のベルン市の富と力は弱く，周辺小都市と同盟を結んで，自衛するほかはなかった。すなわち，シュタウフェン末期には，皇帝派に属して，1251年ブルゴーニュ系諸都市（フリブール，ムルテン，アヴァンシュ）と5年間の同盟を結び，ゲルフ派ルーツェルン市の包囲に参加している。大空位期に入ると，ベルンに直接北に接するキーブルク家 Kyburg から，脅迫を受ける。キーブルク家は，本来ヴィンタートゥール南に本拠をおく豪族であるが，ツェーリンガーの遺領を受け継いで，西方にも大きな領地をえ，そのなかには，ブルクドルフ Burgdorf, フリブール，トゥン Thun の三都市も入っていた。1254年，ベルン市の東端にアーレ河を渡るニーデック Nydeck 橋を架けることで紛争がおきた。アーレ河の対岸はキーブルク領であったのである。武力衝突の危険が生じ，そこでベルンは国王ヴィルヘルム・フォン・ホラントに訴えるが，国王は保護の全権をサヴォア伯ピエールに委任し，1255年5月，ベルンは，ムルテン，ハスレ Hasle とともに，ピエールの保護下に入った。ただし，ベルンには，完全永続従属という条件は付けられなかったようであ

る¹⁹⁾。

それからしばらくサヴォア支配の時期が続くが、1264年、キーブルク家が断絶し、その遺領をルードルフ・フォン・ハプスブルクが獲得すると、両伯の衝突は避けられないかみえた。しかし、対決は避けられ、交渉が続けられ、1273年ルードルフが国王に選出されるにおよんで、ベルンは、ようやく帝国都市に復帰した。ルードルフは、この機会に、1277年、フリブール市を新キーブルク家から銀3,040マルクで購入し、ハプスブルク家領とした²⁰⁾。彼は、さらにブルゴーニュの帝国領回収に執念をもやし、1283年にはついに武力に訴え、そのさいムルテン、パエルヌPayerne両都市を帝国に復帰させた。そして、60歳になったルードルフが、14歳のブルゴーニュ公女と結婚して、反ハプスブルクのブルゴーニュ貴族たちを抑え込むのに成功したのである²¹⁾。

そのルードルフが、1284年、全帝国都市に対して、30分の1の財産税納付を要求してきた²²⁾。ベルン市内では、サヴォア派とハプスブルク派の対立が熾烈化していたが、結局、納付を拒否することになり、怒ったルードルフは、1288年5月、3万の大軍を挙げて攻囲に出た。攻囲は失敗におわった²³⁾が、ベルンは、サヴォアに接近し、伯アマデウスはそれを引き受けたが、ベルンからの報酬が目当てで、積極的なものではなかった。1291年、ルードルフが没し、アードルフ・フォン・ナッサウが国王に選ばれると、国王は、1293年、ベルンの都市法を認め、新たな特許状を追加発布して、帝国都市としてのその地位を確認した²⁴⁾。サヴォアの庇護は解除された。

市内では、国王派が勢力を増し、その下で市政の変革がおこる。手工業者たちが、ツunft結成と市政への参加を要求したのである。1294年2月18日、市参事会は、一般市民に譲歩し、市内の4市区から各4人(任期1年)選出された「16人委員会Sechzehner」を、執政、市参事会の補佐機関として設置することを認めた。この「16人委員会」というのも、議長に当時の執政の甥にあたるJohann von Bubenbergが就任しているところからも判るように、閉鎖的な市参事会に不満をもつ富裕市民に発言の機会を与えようとしたものである。さらに「16人委員会」は、市民4所帯につき1人を選んで、「200人大参事会」を構成させたが、この「200人大参事会」は、毎年、(小)市参事会を形式的に確認するという権限のほかに、欠員が生じたとき、それを選挙するという重要な権限を与えられた。その効果は、1294年、執政に非貴族の市民で、富裕な造幣師Kuno Münzerがはじめて選出されることとなって現れたが、さしあたっては、それ以上の変化はなく、ともかくベルンは、この1人の執政、12人の(小)市参事会、16人委員会、200人大参事会の体制でもって、1798年まで継続していった²⁵⁾。手工業者には、業種ごとに自治的組織を認められたが、政治的組織となることは禁じられたのである。

「200人大参事会」の存在からも判るように、13世紀末のベルンは、人口3,000人、武装可能人員1,000人を数えて²⁶⁾、スイス西部地域では、最有力な政治的団体となりつつあった。そのさい彼らが直面した課題は、政治的主導権をめぐるフリブール市との争いであり、いま一つは、都市の支配領域拡大をめぐる諸領主との闘争であった。まず前者であるが、両都市は、成立当初から、主導権を争いつつも、しばしば同盟もしてきたのであるが、1277年、フリブールは、ハプスブルクの支配下に入ると、にわかに勢力を強め、近隣有力領主を抱き込み、ムルテン、ムードンMoudon、ラウペンLaupen三都市と同盟を結んで、ベルンを圧倒しようとした。ベルンは、国王アードルフを促して、ラウペンを帝国都市に格上げしてフリブールから切り離し、1295年には、ゾーロトゥルンSolothurnを同盟に引き込んだ。1297年、国王アードルフが廃位され、ハプスブルクのアルブレヒトが登位すると、フリブールに味方する領主はさらに増えたので、同年3月2日、フ

フリブールは思い切ってベルン襲撃の拳に出た。しかし、詳細は不明であるが、フリブールの企ては惨敗におわり、1298年、10年間の休戦条約が結ばれた²⁷⁾。

国王アルブレヒトは、オーストリアの問題に手を取られて、西方に介入する暇をもたなかったが、その間に、1301年、新キーブルク家はベルンと10年間の同盟を結び、その支配下の都市ブルクドルフとトゥンは、事が起こったときには、ベルンと行動をともにすることが約束された。さらに同年、ラウペン市と、1306年、ビールBiel市と同盟することによって、ベルンの地位は押しも押されもせぬ強力なものとなり、1308年には、ヴァーツWaadt伯によって脅威を受けたフリブールに対し、救援軍を送ったほどである²⁸⁾。

国王アルブレヒトが西方に帰って来たとき、1308年、暗殺され、つづくルクセンブルクの国王ハインリヒ七世も、ローマで帝冠を受けた帰路、1313年、あっけなく死んだ。そこで、王位をめぐるのバイエルン大公ルートヴィヒとオーストリアのフリードリヒ美公の争いとなるが、周囲のフリードリヒ支持に目もくれず、ベルンは中立を保った。同じく中立を保持した森林三州との共感が生まれてきたのは、このときのことである。しかし、同時に、1315年のモルガルテンの戦いにさいして、西方から侵入したオーストリア軍と戦うため、ウンターヴァルデンの兵がインターラーケンにまで進出し、荒らし回った事実は、かねてこの地に目を付けていたベルンの肝を冷やしたであろう²⁹⁾。モルガルテンに敗れたオーストリア大公レーオポルトは、その復讐とばかり、1318年9月、突如、ゾーロトゥルン市の包囲に出、同時に原誓約同盟の攻撃を企てたが、ベルンの救援によって、ゾーロトゥルンの包囲は失敗におわり³⁰⁾、原誓約同盟への攻撃も沙汰止みになった。こうしたことが重なって、1323年夏、ベルンは、原誓約同盟と対ハプスブルクの同盟を結んだのである³¹⁾。

この1323年の同盟結成には、別の要因として、新キーブルク家の内紛がからんでいた。同家のハルトマンとエーバーハルトのあいだに相続争いが起き、1322年、エーバーハルトが兄を殺し、ベルンに保護を求めたのである。ベルンはオーストリア側の復讐を怖れて、森林三州に接近したわけである。1323年9月19日には、ベルンは、新キーブルク家から、3,000ポンドでトゥン市を購入し³²⁾、都市支配領域拡大の大きな第一歩を踏みだした。翌1324年8月には、ラウペン市を3,000ポンドで買収した³³⁾。このようなベルンの着実な上昇に恐れをなしたフリブールは、キーブルクのエーバーハルトがベルンから離れ、フリブールを頼ってきたことも原因となって、ベルンに対して戦争を仕掛けてくるが、大きな衝突にはいたらず、1333年、和解した³⁴⁾。

ベルンの東方進出はなおも続く。ハスリタールHaslitalは、グリムゼル峠を経てイタリアに通ずる重要な渓谷であるが、ここを支配するヴァイセンブルクWeissenburg家は、14世紀に入って、華やかな生活のため、高利貸から借金し、返済のため住民に重税を課した。住民は、1330年代に入って、ついに蜂起し、ベルンに救援を求めた。ベルンは、1334年春、ヴァセンブルクを攻め落とし、同6月、1,600ポンドを同家に融資して、その抵当としてハスリタールを入手した。1336年には、ヴァイセンブルク家はベルンの永久市民権をえ、その全領地をベルンに委託している³⁵⁾。

このようなベルンの発展は、ブルゴーニュ地区の貴族の反感を高めずにはおかず、諸勢力はまたもや、フリブールを中心として結集した。皇帝ルートヴィヒ・デア・バイエルも、王権争いに敗れたハプスブルクの支持を取り込む必要から、反ベルンの態度を取り、いままで納付していなかった帝国都市税の納入を厳重に要求してきた。20年来ベルンの執政を務めてきたJohann von Bubenber(前出)は、打ち続く戦争、領地購入の出費に鑑みて、和平政策に徹し、ビール市との同盟を解除し、フリブール側をなだめようとした³⁶⁾。しかし、敵意は緩和されず、1339年復活祭、

いわゆる「ラウベン戦争」が勃発せざるをえなかった。フリブール側は、歩兵16,000、騎兵1,000にたったが、ベルン側は市民兵1,200、城外市民3,000（大部分、騎士）、原誓約同盟、ハスリタール、ジンメンタールSimmental（ヴァイセンプルク）からの応援1,500を数えた。ベルンの城外市民となった下級領主、自由民たちが、これだけ多数、ベルン市に忠誠を誓ったというのは驚異のほかはない。6月21日、激烈なラウベン防衛戦が展開され、ベルンが勝利をえた。このとき、ベルン側で、もっとも戦死者の多かったのはウーリ州からの応援部隊であり、戦後、ベルンはこれを補償している³⁷⁾。

1340年8月、ハンガリー王妃アグネスの仲介で、フリブールと5年間の休戦が結ばれ、戦後処理に入るが、翌1241年夏、ベルン市は原誓約同盟との同盟を更新 条文は不明 し、同年冬には、オーストリアと10年間の盟約を結んでいる。1343～1345年、パエルヌ市、ビール市、ゾーロトゥルン市との同盟も復活し、1350年になると、長年ベルンに対するブルゴーニュ地区領主の敵対行為の黒幕であったサヴォア伯の音頭で、ブルゴーニュ地区のラントフリーデが結ばれ、フリブールとの和解が再び成立して、戦争の残したしこりは一応解かれた³⁸⁾。おりからインターラーケンでは、1348年末、ウンターヴァルデンの煽動を受けた住民が、領主である修道院に対して一揆を起こしたが、ベルンは出兵し、翌年2月28日、これを鎮圧し、経済的に困窮していた修道院に1,200グルデンを貸与して、同地をほぼ制圧した³⁹⁾。こうして、「ラウベン戦争」を契機として、「都市国家」ベルンの地位は、不動のものとなったのである⁴⁰⁾。

1351年、オーストリアのアルブレヒト二世が、チューリヒ、および原誓約同盟四州に対して宣戦布告したときのベルンの状態は以上のようなものであった。疲弊したベルンは、アルブレヒトの出兵要請を拒むことができず、しぶしぶ応じ、1352年の二回目のチューリヒ包囲にさいしても、同様にしたが、このまま推移すれば、いずれ原誓約同盟から復讐を受けるであろうことは明白であったので、1353年3月6日、原誓約同盟との「永久同盟」を締結したのであった⁴¹⁾。

この同盟の特異性は、チューリヒの場合とくらべて、ベルン側にきわめて有利なものであった点にある。帝国やオーストリアなど以前からの同盟に対する奉公を除外して、攻撃された場合に、費用自己負担で、相互援助するという原則は共通であるとしても、事態が発生した場合には、原誓約同盟三州の代表者は、ブリューニヒBrünig峠を越えて、ブリーエンツBrienzのキーンホルツKienholzに赴き、ここで事情を説明し、作戦を協議しなければならない（第3条）。援助要請が発せられる要件としては、ベルン側は、都市自体に対する攻撃だけでなく、市民、都市に所属するすべての場所、封土、抵当保有地、所有地、城外市民に脅威が生じたとき、と特別に列挙している（第4条）。三州側が出兵する場合、ウンターゼーンUnterseen インターラーケンの西の地点を越えたときから、兵士一人、一日につき、1リーブル・トゥルネーeinen grossen torneyを支払い、逆の場合も、同様である（第5条）⁴²⁾。なお、付帯文書によって、原誓約同盟の要請を受けて、ベルンはチューリヒ、ルーツェルンを援助し、また原誓約同盟の仲介によって、ベルンは、チューリヒ、ルーツェルンの援助を受けることができる、とされた⁴³⁾。

このような特異性から、法制史家 A.ホイスラーは、ベルンのねらいは、ウンターヴァルデンを牽制し、ハスリタールを含めたオーバーラントをウンターヴァルデンの侵害から守るところにあった。「ラウベン戦争」に払った原誓約同盟の犠牲に対する感謝の念は、14年経ったいま、薄れてしまったのだ、と述べている。その証拠に、同盟加盟ののち、1年経った1354年、ウンターヴァルデンは、インターラーケン、ブリーエンツの住民をけしかけて、領主に反抗させており⁴⁴⁾、15年後

(1371年), さらに10年後と, それはくりかえされているではないか, と⁴⁵⁾。たしかにそういう面もあったことは否定できないが, この大同盟は, 共通の, 潜在的脅威であるオーストリアの存在に対処する方策としてより重要であるとの認識が, 双方の指導者間に共通して存在したのではなからうか。だからこそ, ベルンとウンターヴァルデン間に紛争が起こるたびに, ウーリ, シュヴィーツはウンターヴァルデンを抑えて, 事態をおさめており, またベルンにしても, 自都市の存亡を賭けた「ラウペン戦争」において原誓約同盟が流した血をそんなに易々と忘れられるはずはなかったと思われるのである。

4. ゼンパッハの戦いとネーフェルス山の戦い

1352年9月, 「ブランデンブルクの平和」によって, オーストリアとチューリヒ・森林四州の対立状態は緩和されることになったが, 大公アルブレヒト二世は, この機会に係争問題全体を国王裁判のまへへ持ち出し, 国王の権力を借りて, 問題を一挙に解決しようと考えた。この間に, 国王はルートヴィヒ・デア・バイエルからカール四世へと代わっていたが, カールは, さしあたってはアルブレヒトを支持し, 1353年10月, みずからチューリヒに乗り込み, 調停を試みたが, 交渉は暗礁に乗り上げた。彼は, 翌1354年春, 再度チューリヒに現れたが, 事態は変わらず, ついに誓約同盟側に宣戦布告をするにいたった。彼は軍隊を引き連れて, チューリヒ前面に現れたが, しかし, オーストリア側に決定的有利に問題を解決する意図はなく, 9月には包囲を打ち切って, そのまま, 帝冠受領のためのローマ進軍へと移っていった⁴⁶⁾。

アルブレヒトは, 単独でチューリヒ領を荒らし回ったが, 翌年, ローマからの帰途のカールは, レーゲンスブルクで調停し, 1355年夏, 「レーゲンスブルクの平和」が成立した。内容は, 「ブランデンブルクの平和」と同一であったが, これによって四年間にわたる戦争は終わった⁴⁷⁾。オーストリアは, ラッパースヴィル伯から, 1354年, 1358年二回にわけて, ラッパースヴィルを買い上げ, チューリヒとグラールス, チューリヒと森林三州との連絡路を遮断した。1359年には, チューリヒ市長ブルンは, オーストリアから200グルデンの年金を受け取り, 同政府に奉公することを約したが, 翌1360年死んだ⁴⁸⁾。ブルンは, 都市国家チューリヒの創立者として高く評価しなければならないが, 同時に老獪な外交家でもあったのである。

「レーゲンスブルクの平和」後, 20年間は平穏が続いた。その間に, オーストリアでは, アルブレヒト二世が亡くなり, その子のルードルフ四世建設公があとを継いだ。彼は, ハプスブルクが帝位を継ぐ家という信念に燃え, カール四世の「金印勅書」に対抗して, いわゆるオーストリアの「大特許状」なるものをでっちあげた人物であるが, ティロル獲得に全精力を取られ⁴⁹⁾, スイスに手を出す暇はなかった。1365年, ルードルフが26歳の若さで亡くなると, ハプスブルク家領は, 1369年12月, 兄弟のアルブレヒト三世とレーオポルト三世のあいだに分割され, 弟のレーオポルトが, シュタイアーマルク, ケルンテン, クライン, ティロルとともに, ラインの西のフォアランデVorlandeを支配することになった⁵⁰⁾。このフォアランデにスイスはふくまれている。

兄弟争いが続いている間に, シュヴィーツは, いったんは手放したツーク州に侵入し, これを占拠した。チューリヒでも, オーストリアへの感情は再び悪化し, その不満ぶりは, このころまとめられたと思われる「苦情書」⁵¹⁾にはっきりと表明されている。オーストリア側では, これに武力行動で応える用意はなく, ライン左岸の地域守護Peter von Thorbergをして譲歩させ, 1368年3月,

「トルベルクの平和Thorberger Friede」を結ばせた。それによると、オーストリアへの貢租納付が保証されるかぎり、シュヴィーツのツーク占拠を認めるもので、その結果、その後の数年、ツークの首長Landammannにシュヴィーツ人が就任しているのがみられる⁵²⁾。

このようなとき、西方で大きな出来事が起こった。1375年秋、百年戦争の合間をぬって、フランスのソワソン伯クーシーのアンゲランEnguerrand de Coucyが、自分の母がオーストリア大公の縁続きであることを根拠にして、オーストリアの領地の一部を獲得する目的で、傭兵軍を率いて、ユラ山地を越えてアーレ河流域に侵入してきたのである。傭兵たちは、カプチン会修道士風の頭巾をかぶっており、そこからググラーGuglerと称された。その人数は30,000とも、40,000ともいわれ、おどろいた大公レーオポルトは、1375年10月13日、チューリヒとベルンに応援を求めた。傭兵軍は、アーレ河中流を越え、St.Urban, Fraubrunnen両修道院 それぞれベルンの北東45キロ、20キロ に本拠を置いて、略奪を始めた。冬に入って、困窮した住民たちは、ベルンを中心として反撃に出、12月19日、Buttisholz(ゼムパッハの西方)で、ついでクリスマスの夜、イェンスJens(ビールの南)で、夜襲によって打撃を与え、12月27日、ベルン人がFraubrunnenを襲撃して、これに壊滅的打撃を与えた。打撃と寒さ、飢えに陥った傭兵たちは、1376年2月、ユラ山地を引き返していき、危機は去った⁵³⁾。

「ググラー戦争」は、副産物を残した。ニーダウNidau ビールの南 の領主ルードルフ四世が戦死し、嗣子がなく、遺領の相続問題が起こったのである。彼の妻イザベルが、寡婦資産としてエアラッハErlachを確保したあと、残りの領地は、姻戚関係から新キーブルク伯、ティアシュタインThierstein伯に帰した。しかし、そのなかのアールベルクAarberg領 ベルンの北西20キロ は、8,400グルデンの借金の抵当として、ベルンの管理下に入っており、結局、両者に返済する能力がなく、ベルンの所有下に移った⁵⁴⁾。ニーダウ、ビューレンBürenその他の領地を、キーブルク家はオーストリアに買い取りを求め、大公はその要請をフリブール市に肩代わりさせ、フリブールは40,000グルデンで引き取った⁵⁵⁾。ベルンはこれを歓迎した。というのも、フリブールが、小領主たちの妨害を排して、これらの遠く離れた領地を支配していくには、ベルンの支援を必要とするとみていたからである。このような情勢になると、ブルゴーニュ地区の中小領主たちは、ハプスブルクに対する依頼心を失い、盟主としてベルンにすり寄ってきた。1378年、インターラーケン修道院とその領地は完全にベルンの統治下に入り、1380年、Frienisberg修道院も同様な行動に出て、ベルンに直接西に接する同修道院領地がベルン領となったのである⁵⁶⁾。滅亡寸前のあせりからか、キーブルク家は、最後の冒険に出た。1382年11月11日、ベルン市とフェーデ状態にあったブルクドルフ市を先頭に立てて、ゾーロトゥルンを急襲したのがそれであるが、失敗に帰した。ベルンは、復讐に出、1383年1月、ブルクドルフを包囲した。いわゆる「ブルクドルフ戦争」である。このとき、はじめて火炮が使われたが、射程は短く、山上の城に砲弾は届かなかったといわれる。また、このとき誓約同盟に援軍が要請され、サヴォアからの援軍も派遣されて、総勢6,000人で包囲したが、城は落ちなかった。1384年4月5日、平和が結ばれ、キーブルク家は37,800グルデンで、ブルクドルフ、トゥンをベルンに完全売却し、みずからはラウペン市民となった⁵⁷⁾。こうして中間的領主は除かれ、ベルンは、オーストリアと直接対峙することになった。

おりから南ドイツには、シュヴァーベン、アルザス、ライン各都市同盟が結成されており、1385年2月21日、ベルン、チューリヒ、ゾーロトゥルン、ツークは、コンスタンツ市といわゆる「コンスタンツ同盟」を結成し、この同盟を通じて、シュヴァーベン同盟に、期間9年として、加盟した。

しかし、シュヴァーベン都市同盟の主要な敵はバイエルンにあり、オーストリアに敵対するつもりはなかった。こうして、オーストリアとの対決は、スイスの市民・農民にのみ背負わされたのである⁵⁸⁾。

激突の直接的原因は、ルーツェルンによってもたらされた。1385年に入って、ルーツェルンは、オーストリアの中央スイス支配の拠点であったローテンブルクを占拠し、1386年には、オーストリア所有の小都市ヴォルフゼン Wolhusen、ゼムパッハを自己の市民下に組み込もうしたのである⁵⁹⁾。6月、レーオポルトはブルグに大軍を集め、南方に前進を開始した。そのゆっくりとした前進に助けられて、誓約同盟側は、チューリヒの防衛はその市民に委ね、同盟の救援をルーツェルンに集中し、7月9日、オーストリア軍4,000、誓約同盟側1,500がルーツェルン北方のゼムパッハで衝突することになった。開戦当初はオーストリア軍が圧倒的に優勢で、スイス側は追い詰められたが、突如、形勢は逆転し、オーストリア軍は総崩れとなった。大公レーオポルトは、そのなかで戦死をとげたが、その最後の言葉は、「誇り高く死のう Er wolle lieber sterben mit Ehren」であったという⁶⁰⁾。

ゼムパッハの戦いは、グラールスに奮起を促した。彼らは、レーゲンスブルクの平和によってハプスブルクの支配下にもどされていたが、ゼムパッハの5日後、オーストリアに対して武器を取り、まず Windegg 城（シェニース Schänis の近傍）を占領し、ついで Filzbach 村（ヴァーレン湖南岸）を支配下に入れた。さらに、チューリヒの援軍を受けて、グラールスは、リントールへの入り口を扼する要衝ヴェーゼン Wesen に進入した。誓約同盟三州は、グラールスの行為にあまり関心を示さず、休戦が成立した。しかし、休戦期限が切れた1388年2月22日夜、オーストリア軍は、ヴェーゼンを襲って、グラールス、誓約同盟員からなる駐屯兵を虐殺し、グラールスに服従を要求してきた。グラールスでは、他州にならって、自治機関としての参事会 Rat を設置し、住民全員集会 Landsgemeinde を招集して、自力ででも反抗することを決意した。そして、1388年4月9日、総勢5～6,000人のオーストリア軍を、リントール下流のネーフェルス Näfels に迎え撃った。急を聞いて駆けつけたシュヴィーツの援軍を加えたグラールスは、モルガルテンと同様に、隘路で襲いかかり、オーストリア軍を混乱に陥れた。敗走する兵士たちの重みで、橋が落ち、犠牲者はさらに増えたのであった⁶¹⁾。

これと前後して、ベルン、ゾーロトゥルンもようやく行動に出、さきごろオーストリア領となっただけのビューレン、ニーダウを征服し、オルテン Olten まで進出した⁶²⁾。このような東西の情勢から、オーストリアはこれ以上の戦闘を断念し、全般的平和が成立することになったのである。

5．結束の強化へ

オーストリアとスイス諸州との休戦は、1389年4月1日に実現し、5年間続いたが、1394年7月16日、それは20年間に延長され、さらに1412年5月28日には、平和は50年間に延長された⁶³⁾。

休戦条約の交渉の結果、オーストリアは、原誓約同盟について、1350年までまだ留保してきたところの諸権利を、もはや語らなくなっている。ルーツェルンは、完全な独立をかちとった。もちろん、オーストリア側は、これらの地域における諸権利の放棄を、正式には一言もいっていないのであるが。

グラールスとツークも、完全な自治を獲得した。前者は年200ポンドの、後者は50マルクの、オ

ーストリアに対する貢納義務から解放され、また平和の期間中、オーストリアに所属する臣下が、Burgrecht（庇護権下）へ参入することによる、自治区域の拡張が認められた⁶⁴⁾。

チューリヒも、この平和の期間中を利用して、チューリヒ湖西岸の領地を、それまで領有していたWollishofenから、南のThalwil, Wädenswilへと延ばし、さらにWollerau, Pfäffikonへ、またチューリヒ湖南端北岸のEschenbachを獲得して、チューリヒ湖周辺の土地をほぼ完全に手中に収めた⁶⁵⁾。ただ、長い間、オーストリアの拠点として、チューリヒに抵抗してきたラッパースヴィルが、チューリヒではなく、原誓約同盟とグラールスの共同の庇護下に入ったのは、1464年1月10日のことである⁶⁶⁾。

シュヴィーツは、アインジーデルン修道院をついに支配下に収め、またRigi山塊の東側とその北端のKüssnachtを手中にした。ルーツェルンの成果はもっとも大で、ゼムパッハ戦争の発端となったローテンブルク守護管轄領をはじめとして、Ruswil, さらにその西のエントレーブフEntlebuch溪谷全域を確保したのである⁶⁷⁾。

ベルンの東北方への進出についてはすでに述べたが、ゾーロトゥルンも、西方のAltreu, Brenchenへの進出を果たしている⁶⁸⁾。

このようにスイス各州は、その領域を拡大し、自治行政を強化したが、全体としてのまとまりは、緩やかなままであった。統一的な同盟規約文書も、代議機関も、行政機関も存在しなかった。原誓約同盟の「永久同盟文書」、原誓約同盟とルーツェルンの「永久同盟文書」、誓約同盟四州とチューリヒの「永久同盟文書」、ベルンと原誓約同盟の「永久同盟状」とその付帯文書、グラールスとツークの各「永久同盟加盟文書」は、依然として有効であり、協議事項が生じたときは、その当事州の代表がBrunnen, Einsiedeln, Kienholzなどに会合Tagsatzungした。この会合は、年々頻繁となる。1353年から1400年にかけて48回であったのに対し、1401年から1420年にかけては126回を数え、1418年だけで23回にたったという。しだいに結束が強化していったことが判るが⁶⁹⁾、その同盟の強化を物語る、6州ないし8州の代表が会合し、署名した文書が二つある。

その一つは、1370年10月7日の「坊主協定Pfaffenbrief」である。この協定成立の契機となったのは、チューリヒの故前市長ルードルフ・ブルンの二人の息子、ブルーノとハーデゲンHerdegenが犯した暴力行為であった。ブルーノは、グロースミュンスターの聖堂参事会首席司祭、ハーデゲンはThalwilの守護を務め、オーストリアの家臣であったが、1370年9月13日、ブルーノは、弟ハーデゲンとその徒党に命じて、チューリヒ市場をおとすれた帰途のルーツェルンの首長Peter von Gundelfingenを、Wollishofenで襲わせたのである。このラントフリーデ違反行為に直面したチューリヒ市参事会は、ブルン派の議員が多かった故か、はじめブルーノらに対して厳しい処置に出ることを躊躇したが、危急を告げる警鐘に応じて集まった全市民集会の圧力をうけて、断固たる態度に転じ、ブルーノはグンドルフィンゲンの解放をよぎなくされた。しかし、ブルーノは、聖職者として裁判籍特権を理由に、弟はオーストリアの裁判以外には出頭しないと、ともに都市裁判への出頭を拒否し、窮した市参事会は、彼らを有罪と認めたと、処罰としては永久追放(…ewenklich von únser statt sin und niemer mer dar in komen)を命じただけであった⁷⁰⁾。そして、この機会に「坊主協定」が結ばれたのである。

「協定」は15条から成るが、もっとも重要なのは第2条、および第3, 4条であろう。前者によれば、誓約した諸州に住む者は、「坊主であろうと、俗人であろうと、貴族であろうと、庶民であろうとer sei Pfaff oder Lai, Edel oder Unedel, オーストリア大公に助言や勤務を誓約した者であ

ろうと」、居住する都市、地域の利益と名誉を促進しなければならない、と規定し、後者の条文は、坊主たるものは、州外の裁判に訴えてはならず、そのようなことを行った場合には、政府当局は、なにびとも、当人に対して食事を供給したり、宿泊させたり、保護を与えたりしないことを命ずる、ただし、教会裁判に属する婚姻と宗教上の問題は除く、としている。また、生命、財産を質物に取ったり、身柄を拘束するといった仕方による私闘を禁じているほかに、とくに第9条で「(ザンクト・ゴットハルトの)奔騰する橋からチューリヒにいたる道路」の安全を確保すると協定しているのが注目される。要するに、この協定は、聖職者の美名に隠れてオーストリア側にとって有利な策動が企てられるのを防ぐところに主眼があったが、同時に同盟に統一性をもたらす作用を内包していたのである⁷¹⁾。

いま一つは、1393年7月10日結ばれた「ゼムパッハ協定 Sempacher Brief」である。これにも、直接的契機がある。ゼムパッハ戦後、オーストリアと断絶したチューリヒは深刻な経済不況に陥り、その回復策として、オーストリアとの再接近を図った。市長ルードルフ・シェーノ Rudolf Schöno は、1393年7月4日、オーストリアと「同盟」を結び、誓約同盟内でチューリヒが攻撃を受けた場合には、オーストリアが援助する、オーストリアがゼンパッハで失った土地回復の戦争を起こす場合には、チューリヒは中立を保つことを約したのである。これを知った市民たち、とくにツunft員たちは激昂して裸足教会 Barfüsserkerche に集まり、大参事会への全権委任、オーストリアとの同盟協定の無効、市長らの追放を決議した⁷²⁾。この政変には、原誓約同盟らの説得も大きく功を奏したのであって、政変直後に、チューリヒに居合わせた八州の代表が、興奮さめやらぬうちに、まとめたのがこの「協定」である。これには準加盟州としてゾーロトゥルンも署名した。「協定」は10条から成っているが、その内容を摘記すれば、次の如くである。

- (1) 全誓約同盟所属員相互のあいだのあらゆる暴力行為の禁止、家宅侵入の禁止。
- (2) スイス内で売買を行う商人の、身体、財産の安全保障。
- (3) 担保保証を相互に行わない。
- (4-9) 軍事規定。戦場では軍旗を立て、堅持する。戦場での逃亡を禁ずる。たとえ、負傷しても、逃亡してはならない。戦いが完全に勝利し、隊長が許可するまでは、略奪してはならない。教会・修道院の攻撃禁止。婦女子の保護。
- (10) わがまま勝手な、理由のない戦争行為の禁止。

これは、さきごろのゼムパッハの戦いの経験、教訓をまとめ、いつか将来に予想されるオーストリアとの最後の決戦に備えようとしたものであった⁷³⁾。

* * *

こうしてスイス誓約同盟は、さまざまな紆余曲折を経て、原誓約同盟の段階から八州同盟へと発展し、緩やかな盟約団体の形を取りながら、しだいに強固な連邦国家へと成長をとげていった。その底流にあるのは、ゼンパッハ、ネーフェルスなどの戦いにおいて、「生命と財産を守って」、ともに戦ったという貴重な体験にほかならない。もちろん、スイスは、なお神聖ローマ帝国の枠内にあり、それからの完全独立などはまだ意識されてはいなかったが、帝国の次元でいえば、14世紀後半に顕著となった帝国の弛緩、領邦国家体制の顕在化に応じて、誓約同盟の結束もまた、ラントフリーデ団体の段階から領邦国家的段階へと上昇をとげたといわなければならないであろう⁷⁴⁾。

注

- 1) 八州同盟の成立過程については、U.イムホーフ『スイスの歴史』(森田安一監訳、刀水書房、1997年)、33-44頁に簡潔な叙述がある。
- 2) K.Meyer, *Geschichte des Kantons Luzern*, Bd.1 (1932), S.394-421 ; Nabholz, *Geschichte der Schweiz*, Bd.1, S.150-153 ; *Handbuch d.Schw.G.*, Bd.1, S.202-206.
- 3) Oechsli, *Quellenbuch : Quellenbuch zur Schweizergeschichte*, Kleine Ausgabe (1910), S.117f. ; Nabholz, *Quellenbuch : Quellenbuch zur Verfassungsgeschichte der schweiz.Eidgenossenschaft* (1949), S.8f.
- 4) Meyer, *Luzern*, S.421-475 ; *Handbuch*, S.205f. ルーツェルン市の人口は3000弱であったといわれ、「300人委員会」は、全市民集会にひとしかった。また、この運動は、当時南西ドイツ都市で荒れ狂ったツンフト闘争から影響を受けたものである。Meyer, S.468.
- 5) 本節は、Dierauer, *Geschichte der schweizerischen Eidgenossenschaft*, Bd.1, S.218-261 ; Gagliardi, *Geschichte der Schweiz*, 3.Aufl., Bd.1, S.256-260 ; Nabholz, S.163-174 ; *Handbuch*, S.208-215 ; Largiadèr, *Geschichte von Stadt und Kanton Zürich*, Bd.1, S.124-141.による。
- 6) 森田安一『スイス中世都市史研究』(山川出版社、1991年)、第2、3章をみよ。
- 7) Largiadèr, *Bürgermeister Rudolf Brun und die Züricher Revolution von 1336, 1936*, S.67f.
- 8) Largiadèr, *Brun*, Beilage Nr.30 (S.179.)
- 9) 1350年2月23日のチューリヒの「惨殺の夜 Mordnacht」については、Oechsli, *Quellenbuch*, S.134 ; Largiadèr, *Brun*, S.88f.をみよ。
- 10) *Zürcher Stadtbücher*, hrsg.von Zeller-Werdmüller, Bd.1, Nr.396 u.Anm.1 (S.197f.) 商旅中のチューリヒ商人が、一人平均140グルデンという多額の現金を持ち歩いていたのには驚かされる。
 なお、アグネスは、オーストリア大公アルブレヒト二世の姉で、ハンガリー王妃となり、未亡人となってから、暗殺された父アルブレヒト一世を弔うケーニヒスフェルデン女子修道院の院長となったが、政治的資質に恵まれ、弟から北スイス、アルザスのハプスブルク領地の統括を委任され、誓約同盟との紛争の調停に大きな役割を果たした。
- 11) Nabholz, S.165f. ; Largiadèr, *Zürich*, S.137f. ; *Handbuch*, S.211f.
- 12) Oechsli, *Quellenbuch*, S.135-140 ; Nabholz, *Quellenbuch*, S.14-19.
- 13) グラールスは、ゼッキンゲン修道院領として、大幅な自治を享受する州として経過してきたが、1264年、ハプスブルクの支配下に入った。しかし、反ハプスブルクの風潮が強く、モルガルテンの戦いときには、住民のごく一部がオーストリア側に参戦したにすぎない。1352年6月4日、誓約同盟三州、チューリヒ(ルーツェルンは欠如)と「永久同盟」に入ったが、その条約内容は、チューリヒの場合と同一である。ただし、グラールスが他州に対して遅滞無く義務をはたさねばならなかったのに対し、他州は、援助を行うか否かを、その都度決定する、という不利な条件が付けられていた(第3条)。Oechsli, *Quellenbuch*, S.143f. ; Nabholz, *Quellenbuch*, S.20f.
 ツーク市は、1200年頃、キーブルク家によって建設された都市であるが、13世紀末ハプスブルク家に帰した。その州は、さまざまな領地からなり、南部がシュヴィーツに親近感をもったのに対し、ツーク市自体は、シュヴィーツの略奪行を嫌悪して、反感を抱いていたが、チューリヒ、シュヴィーツの進攻にあって、1352年6月27日、「永久同盟」に加盟した。条約内容は、チューリヒの場合と同一である。Oechsli, *Quellenbuch*, S.145f. ; Nabholz, *Quellenbuch*, S.19. 両州の歴史をやや詳しく叙述している文献としては、Heusler, *Schweizerische Verfassungsgeschichte*, S.99-105.をみよ。
- 14) Nabholz, S.170f. ; Largiadèr, *Zürich*, S.141 ; *Handbuch*, S.214f.
- 15) 本節は主として、Conrad Justinger, *Berner-Chronik* hrsg.von G.Studer (1871) ; R.Feller, *Geschichte Berns*, Bd.1, S.21-174.による。
- 16) Burglehenについては、O.Redlich, *Rudolf von Habsburg*, S.469f.をみよ。
- 17) Justinger, 14 (S.10f.) 1218年、皇帝フリードリヒ二世が賦与したといわれるベルン都市法 *Handfeste* は、今日の研究によれば、13世紀後半の偽作文書とされている。しかし、ツェーリンガーによる建設当初から、ベルンは、大幅な自由を享受した都市であった。 *Handbuch*, S.217.

- 18) ベルン市の市街は、当初から、中央のKramgasse-Gerechtigkeitsgasse、それを挟んだRathausgasse-Postgasse、Münstergasse-Junkergasseの三本筋からなり、中央通りの家屋は、間口100フィート、奥行き60フィートで、100戸を数えたといわれる。家主は、その後、新入住民にこの土地を分割して貸し与え、その結果、間口は大体20～25フィートに狭まった。Feller,S.35.
- 19) ピエール・ド・サヴォアの下で、ニーデック橋は架橋され、また、このころ市域が、西の方へ、ZeitglockenのところからKäfigturmのところまで拡大され、市壁で囲まれたが、そのさいピエールは積極的にこれに関わり、あたかも「都市創建者」の如くふるまったといわれる。Justinger,24-26 (S.17f.) ; Feller,S.48.
- 20) ルードルフ・フォン・ハプスブルクは、キーブルク家遺領を合法的、また暴力的に併合していたが、サヴォア伯ピエールとの闘争ののち、1273年、キーブルクの遺児アンナと彼の甥Eberhard von Habsburg-Laufenburgとを結婚させ、そのさい、諸戦闘の費用4,000マルクの代償として、正式に東スイスの同家領地を譲渡させた。アンナ、エーバーハルトには、フリブール、トゥン、ブルクドルフ三都市、その周辺の根本自領地Allodが与えられ、ここに新キーブルク家が始まった。しかし、彼らには、多額の借財が負わされており、1277年、フリブールのハプスブルクへの売却が強いられたのである。なお、キーブルクの本城は、東方のヴィンタートゥール南にあったが、西方のブルクドルフ北西10キロにも、新キーブルクが築城されている。Redlich, Rudolf von Habsburg, S.103-107,124 ; Feller,S.43-56.
- 21) Feller,S.50-58.
- 22) Redlich,S.491f.
- 23) Justinger,52-54 (S.31f.) ; Feller,S.60f.
- 24) Feller,S.64f.
- 25) Ibid., S.65ff., 74. そのほか、軍事指揮者として、市区ごとに1人の「フェンナーVenner」が選ばれ、この4人のフェンナーが、住民の護民官的役割をも果たしたといわれる。
- 26) Ibid., S.72, 78.
- 27) Ibid., S.70-73.
- 28) Ibid., S.103f.
- 29) モルガルテンの戦いと同じ日、オーストリアは、西方からシュトラスベルクStrassberg伯をして、大軍を率いて、ブリューニヒ峠を越えてウンターヴァルデンに侵入させた。ウンターヴァルデンに内応者がいると期待したからである。しかし、期待は外れ、残留していた者、急を聞いて駆けつけたシュヴィーツ兵などによって撃退され、そのさい、ウンターヴァルデン兵は、インターラーケンまで入った。Justinger, 86 (S.48f.) ; Feller, S.109.
- 30) Justinger, 91 (S.51f.) ; Oechsli, Quellenbuch, S.116 ; Feller, S.111.
- 31) Feller, S.117. ベルンと原誓約同盟との最初の同盟については、同盟文書などは残っていない。
- 32) Justinger, 95-97 (S.53f.) ; Feller, S.115-117.
- 33) Justinger, 98 (S.55) ; Feller,S.118.
- 34) Feller, S.119-122.
- 35) Ibid., S.124ff. ベルンでは、1294年、ユダヤ人追放が行われたので、高利貸はいなかったが、1320年頃、イタリアのアスティからグットウエリGuttueri兄弟が移住してきて、利貸し営業をはじめたといわれる。上層市民、一般市民のなかにも利貸しを営んでいた者もあり、中でもNiklaus Wülが有名であった。ibid., S.68f., 79, 121, 159. ただし、ベルン市が領地を購入する場合、領主に対して高額融資をする場合の金は、パーゼル市から融資されたものであった。ibid., S.146, 176, 198.
- 36) Ibid., S.129-133.
- 37) Justinger, 134 (S.72-94) u. Conflictus Laupensis (in ibid.) S.305f. (Oechsli, Quellenbuch, S.127f.) ; Feller, S.134-139.
- 38) Justinger, 147, 155, 159, 164 (S.102,106,197,110) ; Feller,S.142ff.
- 39) Feller, S.145f.
- 40) 長年、執政を務めてきたブーベンベルク家は、1360年、ベルン市の東南の私有地マッテMatte 水車や革なめし作業場があった を市に寄付し、そこが防壁で囲われることになった。Justinger,190

- (S.122f.) ; Feller, A.166. また, 1374年, Simmental 溪谷下流域が支配地に入り, それより以前, 1300年, ある貴族によって, おそらく戦争の賠償として, 市の南の Belp, 東の Worblental, Vechingen, Settlen, Bollingen, Muri 各村が譲渡される (Feller, S.183f., 73) など, 都市の領域支配の一円化がすすんでいた。
- 41) Justinger, 187 (S.121) ; Feller, S.160ff.
- 42) Oechsli, Quellenbuch, S.146ff. ; Nabholz, Quellenbuch, S.24ff.
- 43) Nabholz, Quellenbuch, S.30ff.
- 44) Justinger, 186 (S.121)
- 45) A.Heusler, Verfassungsgeschichte, S.112f.
- 46) Nabholz, S.175f.
- 47) Ibid., S.176f.
- 48) Ibid., S.177f. ; Largiadèr, Brun, S.96f. u. Beilage Nr.42, 43 (S.192f.) ; Ders., Zürich, S.142f.
- 49) ルードルフ四世の業績とティロル地方の争奪については, ツェルナー『オ - ストリア史』(リンツビヒラ 裕美訳, 彩流社, 2000年), 164頁以下をみよ。ルードルフ四世を本格的に取り扱った書物に, 菊池良生『ハプスブルクをつくった男』(講談社現代新書, 2004年)があり, また A.Wheatcroft, The Habsburgs, 1995, p.42f.にも興味ふかいルードルフの諸側面についての叙述がみられる。
- 50) R.Thommen, Urkunden zu Schweizer Geschichte aus österreichischen Archiven, Bd.2, Nr.58 (S.61) ツェルナー, 訳書, 178頁。
- 51) Züricher Stadtbücher, Bd.1, S.214f. 苦情の内容は, チューリヒ支配下にあり, ハプスブルクによってなお所有されている小都市, 集落などにおいて, 悪税 robstur が取られ, ツォーフィンゲンで鑄造されているオーストリアの悪貨によって悩まされ, ラッパースヴィルの市場でチューリヒ市民が, 靴, 皮革類を高く売ることを強いられている, などである。
- 52) Nabholz, S.188.
- 53) Justinger, 221-225 (S.141-147) ; Feller, S.177ff. ; Handbuch, S.255f. ; Wheatcroft, p.8f. 年代記者ユスティンガーによれば, 侵入者はブリタニア pritanien 出身のイギリス人 engelschen であったといわれる。また, ソワソン伯クーシーのアンゲランは, その後, 1393年, ニコポリスの戦いのとき, イタリアからの義勇軍の指揮官として現れている。Wheatcroft, p.57.
- 54) Justinger, 236, 237 (S.151) ; Feller, S.180f.
- 55) Thommen, Urkunden, Bd.2, Nr.119 (S.123f.) ; Justinger, 231, 233, 234 (S.149f.) ; Feller, S.181.
- 56) Feller, S.182f.
- 57) Justinger, 240, 251 (S.152f., 157f.) ; Feller, S.187-199 ; Handbuch, S.256f.
- 58) Nabholz, S.190f. ; Handbuch, S.259. シュヴァーベン都市同盟については, 拙稿『ドイツ中世都市の歴史的發展』第6章をみよ。
- 59) Geschichte des Kantons Luzern, Bd.1 (P.X.Weber), S.701f.
- 60) ゼムパッハの戦いについての史料, 叙述としては, Justinger, S.163 ; Oechsli, Quellenbuch, S.155-163 ; Dierauer, S.382ff. ; Weber, Luzern, S.704-715 ; Wheatcroft, p.10ff.をみよ。戦死したレーオポルト大公は, ケーニヒスフェルデン修道院に葬られた。
戦機逆転をもたらしたのはヴィンケルリードのアーノルト Arnold Winkelried で, 彼は, 「わしが突破口をつくる.... 皆の衆, 女房, 子供をよろしく頼む He, wend ir's g'niessen lan/Min arme kind und frouwen, so wil ich ein frevel b'stan.... He, ich wil ein inbruch han」と叫んで, 突き刺されながら抱えられるかぎりの槍をつかみ, 突破口をつくった。この有名な話は, Halbsuters Sempacherlied (1382-1434) に初出するが, オェクスリの考証によれば, この歌は, おそらく, 事件直後に書かれ, その後失われた史料にもとづくもので, 彼の実在性は否定されないとされている。Oechsli, S.160f. 年代記では, チューリヒ中央図書館にある断片 (1476年手写本, おそらく1422年の原本にもとづくもの) が最古である (P.X.Weber, S.715ff.) また, ガリアルディによれば, 当時のものと判定されるウンターヴァルデンの戦死者埋葬ミサの名簿のトップにアーノルト・ヴィンケルリードの名前がしるされているという。Gagliardi, Bd, 1, S.273 Anm.1.
- 61) Justinger, 267, 270 (S.168ff.) ; Oechsli, Quellenbuch, S.164f. ; Dierauer, S.396-404 ; Nabholz,

- S.194ff. ; Handbuch , S.261f. ネーフェルスとの戦いののち、スイス側は、各州から兵を集めて、ラッパースヴィルを包囲したが、陥落させるにはいたらなかった。Justinger , 271 (S.170) ; Handbuch , S.262.
- 62) Justinger, 269, 272, 273 (S.168f. , 170ff.) ; Dierauer, S.405-408 ; Feller, S.202ff. ; Handbuch , S.262. ゼンパッハの戦いにさいし、ベルンが援軍を出さなかったのは、6月25日付けのチューリヒからの救援要請状がベルンに到着しなかったからである、とフェラーは書いているが、現在の研究では、そのようなことはありえない、とされている。Handbuch, S.260 Anm.94.ベルンは、打ち続く戦争と財政の枯渇から完全に疲弊し、かつ底流にあるウンターヴァルデンに対する不信の念から、消極的態度に出たのが実情ではなかったろうか。
- 63) Nabholz , S.196 ; Handbuch , S.262.
- 64) Nabholz , S.197.
- 65) Ibid.
- 66) Dierauer , Bd.2 , S.166f.
- 67) Nabholz , S.197.
- 68) Ibid. , S.198.
- 69) Heusler , S.120.
- 70) Largiadèr, Brun, S.99f. u. Beilage Nr.48-55 (S.198-204) ; Züricher Stadtbücher , Nr.20-22 (S.229-231) 1370年の事件ののち、幾多のフェーデがブルーノに対して起こされているが、他方、支持勢力もあり、なかでも市参事会員の未亡人で、通称“ Epplin ” と呼ばれた女性は、アールガウのバーデン市 彼女の出身地 でブルンと「一大陰謀 gross heimlichu hatt」を企んだといわれる。市参事会は彼女に、チューリヒに半マイル以内に近づくことを禁じ、違反した場合には、処罰として「目を潰す so sol man si blenden」と決議している。Stadtbücher, Nr.3, 4, 6, 29 (S.221-237) なお、ブルーノの従兄弟エーバーハルトとその徒党が、1363年8月6日、首席司祭の Felix Stucki を殺害する事件を起こしているが (Largiadèr, Brun, S.101) , おそらくブルーノの指示によるのではなからうか。ブルン家が、ついにチューリヒから姿を消すのは、ルードルフの息子たちの放埒な行為の結果であった。
- 71) Oechsli, Quellenbuch, S.152f. ; Nabholz, Quellenbuch, S.33f. ; Dierauer, Bd.1, S.334f. ; Heusler , S.121f. ; 森田安一 『スイス』 52頁。オーストリア側を刺激するのではないかと危惧して、ベルンはこの協定に署名しなかった。
なお、この時期、借金をめぐる紛争が、都市裁判ではなく、教会裁判に提訴されることが多発するようになっており、それを機会とする教会の政治介入を避けるため、この「協定」が取り決められたという意味もあった。F.Elsener, Der eidgenössische Pfaffenbrief von 1370, ZRG.KA.75 (1958) , S.128f.
- 72) Largiadèr, Zürich , S.164f. ; Nabholz, S.201f. チューリヒの両天秤政策が、誓約同盟一辺倒へと安定化するのち、「古チューリヒ戦争 Alter Züricherkrieg」(1436-1350) 後のことである。
- 73) Oechsli, Quellenbuch, S.168ff. ; Nabholz, Quellenbuch, S.36ff. ; Dierauer, S.410f. 森田, 前掲書, 54頁。
- 74) B.Meyer, Die Bildung der Eidgenossenschaft im 14. Jahrhundert: Von Zugerbund zum Pfaffenbrief, 1972, S.220ff.

(本学名誉教授)